

● 取組編



用語の定義

コアメンバー……ひきこもり支援のネットワークづくりにおいて中心となる支援機関

コアメンバーが果たす役割: ネットワークづくりのコーディネーター。ネットワーク推進において、実態調査や各会議の内容を検討する。

ワーキンググループ…コアメンバーがひきこもり支援ネットワークを推進するための話し合いをする場

ネットワーク会議……ひきこもり支援に携わる支援者がひきこもり支援ネットワークを推進するための話し合いをする場

1 ひきこもり支援ネットワーク推進の取組事例

1 A市の取組～コアメンバーの誕生から始まるネットワークづくり～

コアメンバー：社会福祉協議会、市主管課、保健所

【背景】

A市は生活上の様々な課題を丸ごと相談できる窓口（福祉総合相談窓口）を社会福祉協議会（以下「社協」という。）に委託しており、社協がひきこもり相談を受けています。重層的支援体制整備事業の実施に伴い、A市と社協はひきこもり支援の関係機関とのネットワークの重要性を認識し、ネットワークづくりに向けて取組を始めました。

A市でひきこもり支援を掲げている機関は社協だけでした。そのため、ひきこもり支援のネットワークを共に考えていける仲間をつくることから始まりました。



	準備会	第一回ワーキンググループ
目的	<ul style="list-style-type: none"> ひきこもり支援ネットワークづくりに向けての意見交換 	<ul style="list-style-type: none"> A市におけるひきこもり支援に関する課題の明確化 ネットワーク会議の企画の検討 今後の取組内容を整理
内容実施	<ul style="list-style-type: none"> ひきこもり支援の現状の共有 	<ul style="list-style-type: none"> ひきこもり支援ネットワークづくりに向けた今後の取組の検討
コアメンバーの動き	<ul style="list-style-type: none"> 社協が企画運営し会議を開催 	<ul style="list-style-type: none"> ひきこもり支援ネットワークのイメージ化を図る 実態調査の必要性を共有し、調査の目的・ねらいを検討 今後の計画案（取組内容、スケジュール等）について検討
実施にあたってのポイント	<ul style="list-style-type: none"> 支援機関同士が顔を知る機会とする。 ひきこもり当事者との関わり状況、困りごと、ひきこもり支援をどのように考えているか等について共有する。 A市のひきこもり当事者や家族の思いを共有する。 	<ul style="list-style-type: none"> ネットワーク会議のメンバー構成について意見交換する。 ネットワークのあり方についてイメージが共有できるよう意見交換をする。
成果	<ul style="list-style-type: none"> ひきこもり支援で関係機関と連携できる可能性が確認され、今後、各機関の連携促進に向けた働きかけが必要であると認識できた。 ひきこもり支援のネットワークをつくっていくことについて参加者と確認できた。 	<ul style="list-style-type: none"> ひきこもり支援を考えていくコアメンバーが課題や取組について明確化できた。 今後連携を推進していきたい関係機関を絞り込み、働きかけていく内容が整理された。

Point | ～コアメンバーの誕生～

市主管課と社協で検討の場を持ち、A市の課題を整理し、今年度重点的に取り組みたいことを明らかにした。

【取組計画】

- ①実態調査の実施 ②ネットワーク会議の開催

「ケースを皆で検討できる場が欲しい」「家族や当事者の思いを共有できる場が必要だ」そんな思いが重なったタイミングで、今回のネットワークづくりが始まりました。

開所以来ひきこもりに関する相談を受けてきました。年々相談件数は増え、ご家族や当事者の方からの相談は、居場所のこと、就労、生活支援、住まい、疾病、DV、虐待など複合的な課題が絡み合っています。似ているようでいて、ひとつとして同じ相談はありません。見立てやアセスメントが重要で、個別的な支援が求められます。

A市ではネットワークを立ち上げる上で初めてひきこもりに関わる多様な関係者が一堂に会する準備会を開催しました。それぞれが異なる立場で支援に関わる中で、顔を合わせ、思いを語り合う場となりました。支援の現場では、担当する業務や制度の違いから、ひきこもりへの捉え方やアプローチが異なることがよくあります。この会を通じて「お互いを知ること」の大切さに改めて気づかされました。そして最後に参加者のみなさんがひきこもり支援ネットワークづくりに賛同していただきました。家族会や民間企業、NPO、社会福祉法人との連携も広がり、居場所などの社会資源も少しずつ増えてきました。家族や当事者の声が届き、支援者のニーズにも応えられるネットワークを築いていきたいと考えています。



コアメンバーと実態調査の対象機関との相互理解

コアメンバーと実態調査の対象機関との連携

コアメンバーの間で課題共有

第二回ワーキンググループ

実態調査

- スーパーバイザーからひきこもり支援の考え方やネットワークづくりの考え方について学ぶ
- A市におけるひきこもり支援機関に対する実態調査の内容の検討
- ネットワーク会議の企画を検討

- 実態調査対象機関の支援の現状や連携の課題等を明確化
- 実態調査対象機関とコアメンバー間の相互理解、顔の見える関係の構築

- スーパーバイザーの講義、A市の現状共有、実態調査内容の検討

- アンケート [資料①P33](#)、ヒアリング調査 [資料②P37](#)

- 社協が考えたA市のひきこもり支援の特徴や課題を踏まえ、市主管課中心に実態調査案を作成

- 社協、市主管課が中心となり調査を実施
- 社協、市主管課以外の機関が共にヒアリングすることで、相互理解が進むことが期待できる機関には保健所が同席

- 講義（ひきこもりの定義、支援のあり方等）を踏まえネットワークづくりに必要な要素を考える。
- 実態調査の目的とねらいを整理した上で、調査内容と方法について検討する。
- 相互理解に向け効果的な調査となるよう調査項目を検討する。

- ヒアリング調査は各実態調査対象機関に合わせた内容で実施する。
- 実態調査対象機関のひきこもり支援の実情を把握し考えや取組、支援観について知る。

- A市のひきこもり支援の現状について共通の認識を持つことができた。
- 実態調査で明らかにするポイント（各機関のひきこもり支援の実態や連携の仕方等）が具体的になった。

- 実態調査の打合せを繰り返すことで市主管課と社協間での課題意識が深化した。
- 調査を通してお互いの支援内容や支援観を知ることができた。
- 社協が感じている課題について実態調査対象機関と共有ができた。
- 調査先の本質的な課題や現状を具体的に掘り下げて聞くことができた。
- ネットワーク会議で取り組む課題が明確化できた。

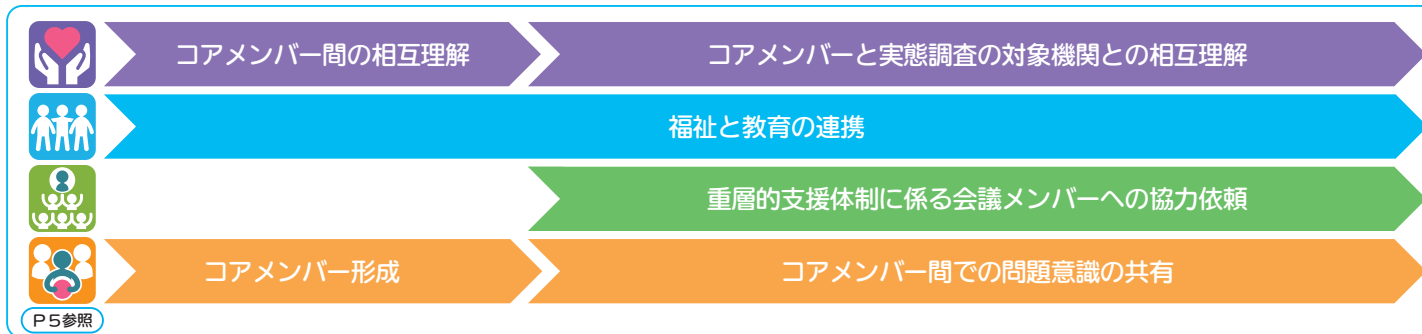
Point | ~相互理解~




市主管課と社協が共に実態調査を行い、結果について検討する場を持つことで共通認識が図れ、ネットワークのあり方が明確になった。

2 B市の取組～既存の重層的支援体制を活用したネットワーク推進～

【背景】

B市では、市直営の福祉総合相談窓口とひきこもりサポート事業を受託している事業所がひきこもり支援を担っており、他機関とひきこもり支援に対する意識に差がありました。また教育分野と福祉分野がお互いの取組状況を把握できていないという課題もあったため、ひきこもり支援の中心となる支援機関と教育主管課によるワーキンググループを結成し、ネットワーク推進に向けた取組が始まりました。



	第一回ワーキンググループ	実態調査	第二回ワーキンググループ
目的	<ul style="list-style-type: none"> 関係機関の取組と支援対象者の現状の把握と課題の検討 実態調査に向けた準備 	<ul style="list-style-type: none"> ひきこもり支援に携わる関係機関の機能や役割を整理 ひきこもり支援における市全体の課題を明確化 	<ul style="list-style-type: none"> 実態調査結果の共有及び関係機関の機能と役割の共有
内容実施	<ul style="list-style-type: none"> 実態調査の内容を検討 	<ul style="list-style-type: none"> アンケート、ヒアリング、事例の抽出 	<ul style="list-style-type: none"> 実態調査結果の共有、連携課題の検討、ネットワーク会議の企画
コアメンバーの動き	<ul style="list-style-type: none"> 支援のはざまに落ちやすい対象者像とネットワークの課題を明らかにするための調査内容について検討 	<ul style="list-style-type: none"> アンケート  資 ① P33、ヒアリング  資 ② P37 の様式作成と実施 	<ul style="list-style-type: none"> ひきこもり支援における連携の課題を検討 ネットワーク会議の内容を検討
ネットワークの動き	—————	<ul style="list-style-type: none"> アンケートやヒアリングへの対応、事例シート  資 ③ P38 を作成する。 	—————
実施にあたってのポイント	<ul style="list-style-type: none"> 実態調査について関係機関の課題を出し合い、ネットワーク上の課題を明らかにするための調査内容を検討する。 コアメンバー間のネットワーク推進の意識醸成を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> アンケートは回答しやすい電子申請システムを活用する。 ヒアリングは事前に実施メンバーで重点的に聞きとりたい項目を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> 調査の結果から整理した課題を検討する。 支援のはざまに落ちている対象者を共有する。
成果	<ul style="list-style-type: none"> ひきこもり支援について意見交換し、各機関の支援観の違いに気づいた。 福祉と教育の関係機関のつながりを持つことができた。 	<ul style="list-style-type: none"> 調査に応じた機関は自機関のひきこもり支援を振り返る機会となった。 ヒアリング実施機関は、各機関の役割と支援のはざまに落ちやすい対象者像とその背景が見えた。 	<ul style="list-style-type: none"> 各機関の役割と支援対象者の範囲や傾向に気づいた。 機関毎に伴走型支援と課題解決型支援の比重が異なることに気づいた。 ここまでの取組を共有し、目指すべき方向性を確認することができた。

コアメンバー：市ひきこもり支援主管課、市教育主管課、地域若者サポートステーション、ひきこもり支援事業所、保健所
ネットワーク会議メンバー：コアメンバー、市高齢主管課、市障害主管課、市子ども家庭支援主管課、市児童青少年主管課、生活自立支援機関、社会福祉協議会、地域活動支援センター

ひきこもり支援を掲げていない機関にもネットワーク会議への参加を依頼しました。社会福祉協議会では、ボランティアの問い合わせからつながったひきこもりの方を地域若者サポートステーションにつなぎました。その後も相談を継続していることがわかり、支援ネットワークにおいて大切な役割を担っていることが明らかとなりました。

ネットワーク会議メンバー間の相互理解

ネットワーク会議メンバー間の連携の強化

重層的支援体制の活用

コアメンバーからの働きかけ

第一回ネットワーク会議	第二回ネットワーク会議	第三回ネットワーク会議	第四回ネットワーク会議
<ul style="list-style-type: none"> コアメンバーからネットワーク会議メンバーへネットワークを広げる 各機関の取組や現状、課題の共有 	<ul style="list-style-type: none"> 支援のはざまに落ちやすい当事者像の把握 効果的な連携の検討 	<ul style="list-style-type: none"> 当事者像と課題を踏まえ個別性に合わせた効果的な支援とネットワークのあり方について検討 	<ul style="list-style-type: none"> 市の課題と各機関の特徴や強みを改めて整理 ネットワーク強化に向けた共通認識を図る
<ul style="list-style-type: none"> 事例シート 資料③ P38 の共有、はざまに落ちやすい当事者像と連携の課題を共有 	<ul style="list-style-type: none"> 事例検討 	<ul style="list-style-type: none"> これまでの振り返りと課題を踏まえた取組の検討 	<ul style="list-style-type: none"> これまでの振り返りとグループワーク
<ul style="list-style-type: none"> 調査結果と課題案の検討 	<ul style="list-style-type: none"> 事例の選定、事例検討シート 資料④ P39 の作成 	<ul style="list-style-type: none"> 課題案を再検討 	<ul style="list-style-type: none"> ネットワーク推進のためのグループワークシート 資料⑤ P40 の作成
<ul style="list-style-type: none"> 調査を踏まえ気づいたことを共有する。 	<ul style="list-style-type: none"> 事例の検討を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 各機関の役割を伴走型支援、課題解決型支援で整理する。 	<ul style="list-style-type: none"> 事前にワークシートを記入し自機関の特徴や強みを整理する。
<ul style="list-style-type: none"> ネットワーク会議メンバー間のネットワークづくりの意識醸成を図る。 調査で伝え切れない意見を共有する。 	<ul style="list-style-type: none"> 各機関の支援観や役割、機能について意見交換する。 事例の処遇検討ではなく、支援のはざまに落ちやすい当事者像の把握とネットワーク推進に向けた検討を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 各機関の役割を整理した上で可能な取組について意見交換する。 	<ul style="list-style-type: none"> 各機関の役割を整理しながら「のりしろ(支援の余白)」を広げるために新たに取り組みたいことについて意見交換する。
<ul style="list-style-type: none"> 各機関が他機関の支援内容を把握し、自機関のひきこもり支援について考える機会となった。 	<ul style="list-style-type: none"> 各機関が年齢や制度のはざまを意識した連携をイメージし、はざまを埋めるためにできることを考えた。 	<ul style="list-style-type: none"> 各機関の役割について理解できた。 多機関連携の必要性が理解できた。 	<ul style="list-style-type: none"> ひきこもり支援窓口か否かに関わらず自機関での支援のあり方を考えることができた。

コラム 「柔軟で切れ目ない支援体制を目指して」：B市ひきこもり支援主管課

B市の福祉総合相談窓口は、地域のひきこもり支援の相談窓口として機能しており、特に、中高年のひきこもりに関する相談が多く、ご本人やご家族の切実な声に触れる機会が増えています。今回の取組を通して得られた気づきを、ここで整理しておきたいと思います。

まず一つ目は、どの年代においても起こりうる『ひきこもり（不登校）』の課題は長期化する事例もあり、多機関での連携、切れ目ない支援の重要性を改めて感じました。二つ目は、各課、関係機関へのヒアリングや意見交換の場を持つことで、お互いの業務や強みを知る良い機会になり、相互理解が進みました。顔の見える関係づくりが、支援の質を左右するのだと実感しました。三つ目は、支援の「継続性」について考える機会が得られたことです。教育部門から子ども部門、子ども部門から福祉部門へと支援をつなぐ際、これまでの支援が途切れないよう“どう引き継ぐか”が大きなテーマだと思います。保健所の分析により、B市では、年齢の境目で生まれるはざまを市内ひきこもり支援事業所が丁寧に伴走している現状が明らかになりました。年齢の境目による支援の切れ目をつくらないためにも、適切な支援機関へ適切なタイミングでつなぐ意識が芽生えたのではないかと思います。四つ目は、ワーキンググループ内で行った「課題解決型支援」と「伴走型支援」の役割に関する議論です。各部署がどのような役割を担い、どのような支援が向いているのか、その傾向を整理し把握できたことは、今後のネットワーク構築を考えるうえで重要な収穫でした。一律の課題解決型思考は、制度のはざまを生み出すことにもなり得ます。私たちがこの点を肝に銘じ、それぞれの機能を活かした柔軟な支援体制を目指していく必要があります。

今回の取組が圏域にも広がりひきこもりの広域連携につながることを期待しています。

